

□ 第 11 回 太平洋学術会議の植物部門 1962 年に第 3 回を東京で開催した太平洋学術会議は、太平洋の諸国をまわりまわって、第 11 回を 1966 年 8 月に、再び東京で開くことが昨年末の閣議で承認された。いずれ詳しい日程は主催団体である日本学術会議から発表されるであろうが、とりあえず植物関係だけについて簡単に紹介しておく。この会議には常置機関として、ハワイに本部をおく太平洋学術協会 (Pacific Science Association) があるが、それには 19 部門の常置委員会があり、植物関係では第 3 番目に植物学 (Botany) がある。この植物学部門の委員長は Dr. F.R. Fosberg (U.S.A.) で、書記は Dr. M.S. Doty (U.S.A.) である。そしてさらに 11 の小委員会 (Sub-committee) に区分される。次にその小委員会の名称と委員長の氏名とを列記する。

1. Ethnobotany (Dr. Jacques Barrau; New Caledonia), 2. Medicinal Plants (Mr. A. Dilmy; Indonesia), 3. Protection of Nature in the Pacific (Dr. Elizabeth McClintock; U.S.A.), 4. Pacific Algology (Dr. R.F. Scagel; U.S.A.), 5. Pacific Plant Areas (Dr. G.G.G.J. van Steenis; Netherland), 6. Vernacular Names (Dr. Mona Lisa Steiner; Germany), 7. Pacific Plant Ecology (Dr. R. Story; Australia), 8. Pacific Palynology (Dr. Donald Walker; Australia), 9. Pacific Bibliography (Dr. E.H. Walker; U.S.A.), 10. Pacific Plant Genetics (Dr. D.E. Yen; New Zealand), 11. Pacific Systematic Botany (Dr. Masami Sato; Japan).

なお、第 11 回大会を実際に運営するために、日本学術会議に組織委員会が設けられたが、そのメンバーは太平洋学術協会の委員会の区分とは無関係に、気象、海洋、地球物理、地質、生物、農学、水産、医学、社会科学、人類、地理、学術情報の 12 部門から、研連または学会を通じて若干名ずつ選出された。植物関係の組織委員は、山田幸男 (北大)、細川隆英 (九大)、原寛、門司正三 (東大)、津山尚 (お茶大)、佐藤正己 (茨大) の 6 名で、これが動物関係の 5 名 (山階芳磨、安松亭三、波部忠重、朝比奈正二郎、北沢右三) と合して生物部門を担当することになった。部門の委員長には山階 (原)、幹事には佐藤 (波部) が互選された (括弧内は副)。

今後は日本側の組織委員会と協会側常置委員会が、各国の学者と連絡をとりながら仕事を進めて行くわけであるが、何分にも広範囲な学会なので、その運営には色々な困難な問題がある。関係者の協力によって、成功裡に第 11 回会議を終りたいものである。
(佐藤正己)

正 誤 (Errata)

頁 (Page)	行 (Line)	誤 (For)	正 (Read)	頁 (Page)	行 (Line)	誤 (For)	正 (Read)
19	10	東北大学	東京大学	21	28	変北	変化
19	22	1 枝	1 枚	21	1	anc	and
19	24	7 枝	7 枚	23	4	close	closely
21	15	漸鋭先端	漸鋭先形	23	6	leaves the	leaves, the
21	23-24	ヒトツバテンナンモヨウ	ヒトツバテンナンショウ				